

2013 年度

博 士 論 文

版画表現における「顔」について

多摩美術大学大学院美術研究科

李 元 淑

2013 年度

博 士 論 文

学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲第 54 号
学位授与日	平成 26 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当

主査 諸川春樹 教授

副査 中村隆夫 教授

副査 小林敬生 教授

副査 佐川美智子（町田市立国際版画美術館副館長）

版画表現における「顔」について

多摩美術大学大学院美術研究科

李 元 淑

幼い頃は自然と共に生きていたが、突然自然の中の生活とは正反対である都市という場所へ引越し、生活することになった。いつも友人であった自然との生活はできなくなり、そのかわりにどこへ行っても無数の都市の人々の中で生きなければならなくなった。

都市の中で生きる多くの人々の表情は、真夏の灼熱の太陽の下で倦み疲れた老犬のような表情をしていた。それはまた、真夏の日照りに干からびてしまったあぜ道の草のように、希望を失った、どこか萎びた表情でもあった。彼らの表情の中に、私は肯定的なものを何も感じ取ることができず、希望さえも見出すことができなかった。こうして私は、生まれて初めて大きな精神的衝撃を受けることとなった。

さらに観察すると彼らの顔は、焦点の定まらぬ狂犬の表情をしており、そこに運命の車輪の下に自身の存在を無条件に受け容れ、諦め、委ねてしまったときに現れる悪酔いしたような表情や、自身の生命にすら無関心のように見える深い無責任さを見て取ることができた。

このように都市の人々の表情は、幼い私に大きな衝撃を与えた。私は都市の中で生きていく現代人の顔を見、それと同時に私自身の顔を見た。

初めて「自画像」を描いた20代の作品を観察してみれば、顔の外形そのものの線に多くの意識を集中し、心理的に異化することなくモノそのもののまを描いていたようだ。私は未熟だった。自分にしかわからない世界に閉じこもり、顔の本質を理解しようとしていなかった。「自画像」のシリーズを見れば感じ取れるように、そこには顔の外的な表情、形態、色感だけに頼りながら、画面に多様な変化を与えようとしている。それは表面的な作業であった。今、あらためて眺めてみると、ただ自分自身がナルシズムに陥ってじたばたしている弱気さだけが画面にいっぱいあふれるばかりである。自己に対する嘔吐感に似た葛藤の中で、私は創作を継続してきたのだ。

この偽りに気づき、それを乗り越えようとする中から、私以外の他者の表情はどうなのか、特定の状況に人がおかれた場合、いかなる心理状態でその人は生きて行くのか、ということが気になり始めた。

'偽り'の表情は静止した状態ならともかく、瞬間的に生まれる感情には適応できない。例えば、幼い子供や先住民族の表情は現代人よりは自然発生的な表情を見せているといえる。私は'偽り'と真実が共存している現代人の顔の表情と、子供あるいは先住民族の自然発生的な顔の表情を比較して分析してみることにした。

するとどうだろう。現代人の顔を表現した私の「自画像」シリーズでは説明できないような部分が'自然の顔'の中に見出せるようになった。こうして自然と人間が共存して生きている時だけが人間らしい顔の表情になる可能性があることに気づいた。人間の顔と自然の顔を共存させて描くということで、幼い時に経験した自然と共に生きる自己の本来の姿を取り戻すことが出来るかもしれない。それは失われた過去の、自分らしい自分を再び新しい形で生き返らせることができる唯一独自の方法であるように思えた。この方法なら、私の中で自然と人間が一つになるのである。

本論ではこのような個人的な経験を背景にして、今までさまざまに変化してきた自身の仕事を「自画像」、「人間の顔」そして「自然と人間の顔」という三つの観点から再評価しようと考えている。

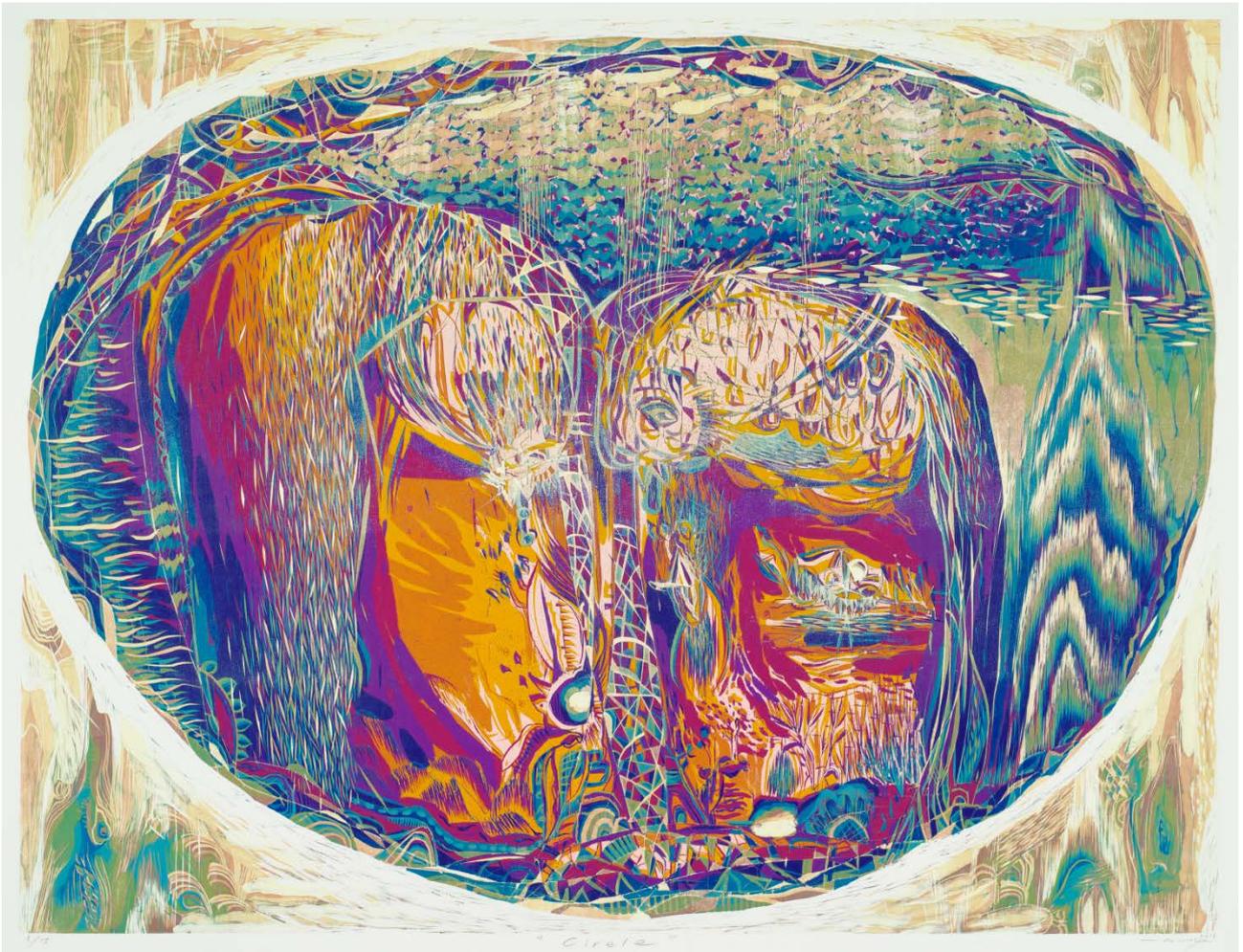
この再評価に際しては、私の作品だけでは主観的になりすぎるので、独自の顔を描いた作家として知られている中村正義、パブロ・ピカソ、エドヴァルド・ムンク、ジェームズ・アンソール、フランシス・ベーコンの作品を例に挙げて、私自身の作品との類似点や相違点を分析してみようと思う。また後半では技法と色の関連性に関して、木版画の技法である「彫り進め技法」で表現した作品を別の角度から分析してみることにした。こうした時代を生きている一人の芸術家として、私は何をしなければならないのだろうか。そこで私は鬱屈した内的欲求が浄化されることを願い、その証としての外部表出を期待して、顔の表情を一枚の絵画作品に表現しようと思ったのである。木版画の「彫り進み多色木版画」の技法を用いた作品を通して、きっと自分自身と人々の心の本質に少しでも近づけるだろうと考えている。

ではなぜ、「彫り進み多色木版画」なのか。本論では作品の制作過程のところで述べたが、私が絵を始めたのが油絵からであったこと。その油絵を制作するときの一つ一つの筆の運びと色の重ね方が、版木に彫刻刀によって痕跡を作ることや紙に色の段階が重ねられていくことと同じ感覚であったこと。そのために「彫り進み多色木版画」が大変魅力に見えたこと。しかし何よりも制作の過程から生まれる多様な痕跡や色そのものが、現代人が生きる悩みや苦しみ、葛藤などを感じさせる表現にもっとも適しているように思えたからであり、それが「彫り進み多色木版画」の力となって、私の願いをかなえてくれるように思われたからであった。

私自身の作品論を媒体として顔とその造形性、そして芸術の社会的役割についての見解や宗教的解釈に至るまで多様な角度から検討を行いたいこうした論考を通じて、最終的には自身の作品世界に理論性がもたらされ、自身の表現がより豊かで堅固なものになることを期待している。

創作研究による作品

多摩美術大学学位規程第4条第2項



サークル (Circle) 2013 木版画 70.0×91.5cm

Circle 2013 Wood-cut 70.0×91.5cm



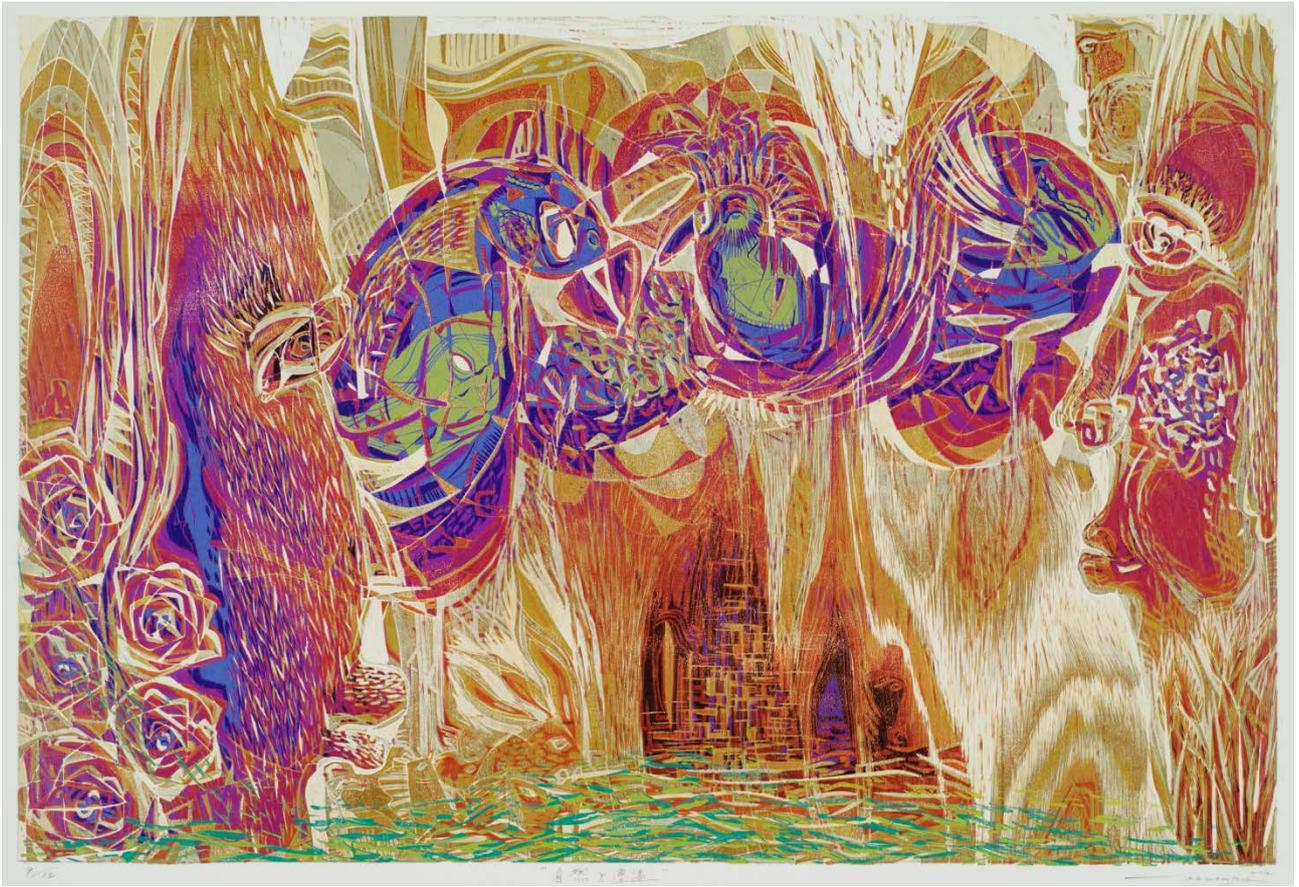
孤島を待ちながら 2011 木版画 71.0×142.0cm

Waiting for lonely island 2011 Wood-cut 71.0×142.0cm



花火 2012 木版画 91.0×70.0cm

Fireworks 2012 Wood-cut 91.0×70.0cm



自然と遭遇 2012 木版画 51.0×75.0cm

Encounter with Nature 2012 Wood-cut 51.0×75.0cm



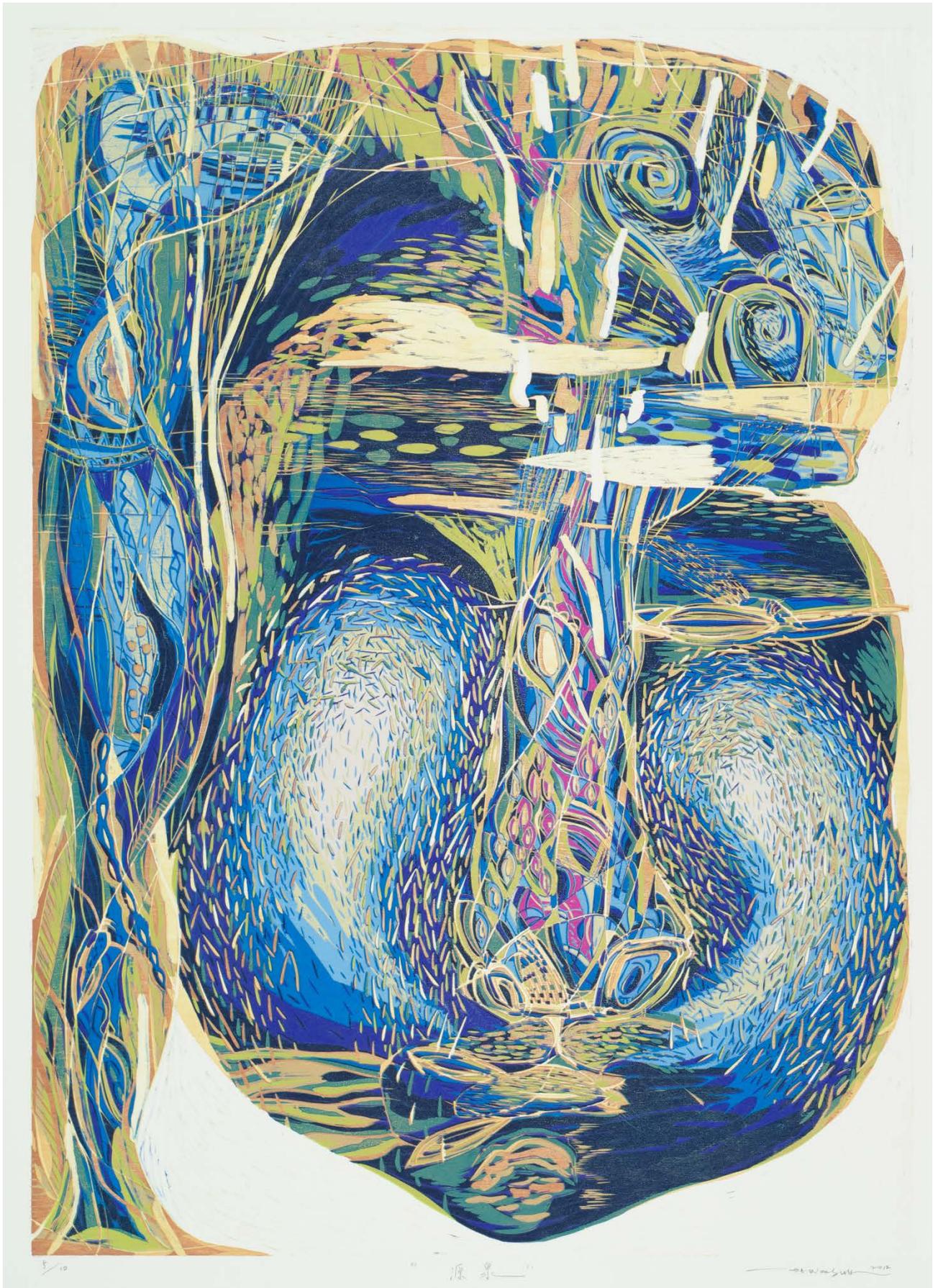
山河で流れる 2013 木版画 58.0×87.0cm

Flowing among 2013 Wood-cut 58.0×87.0cm



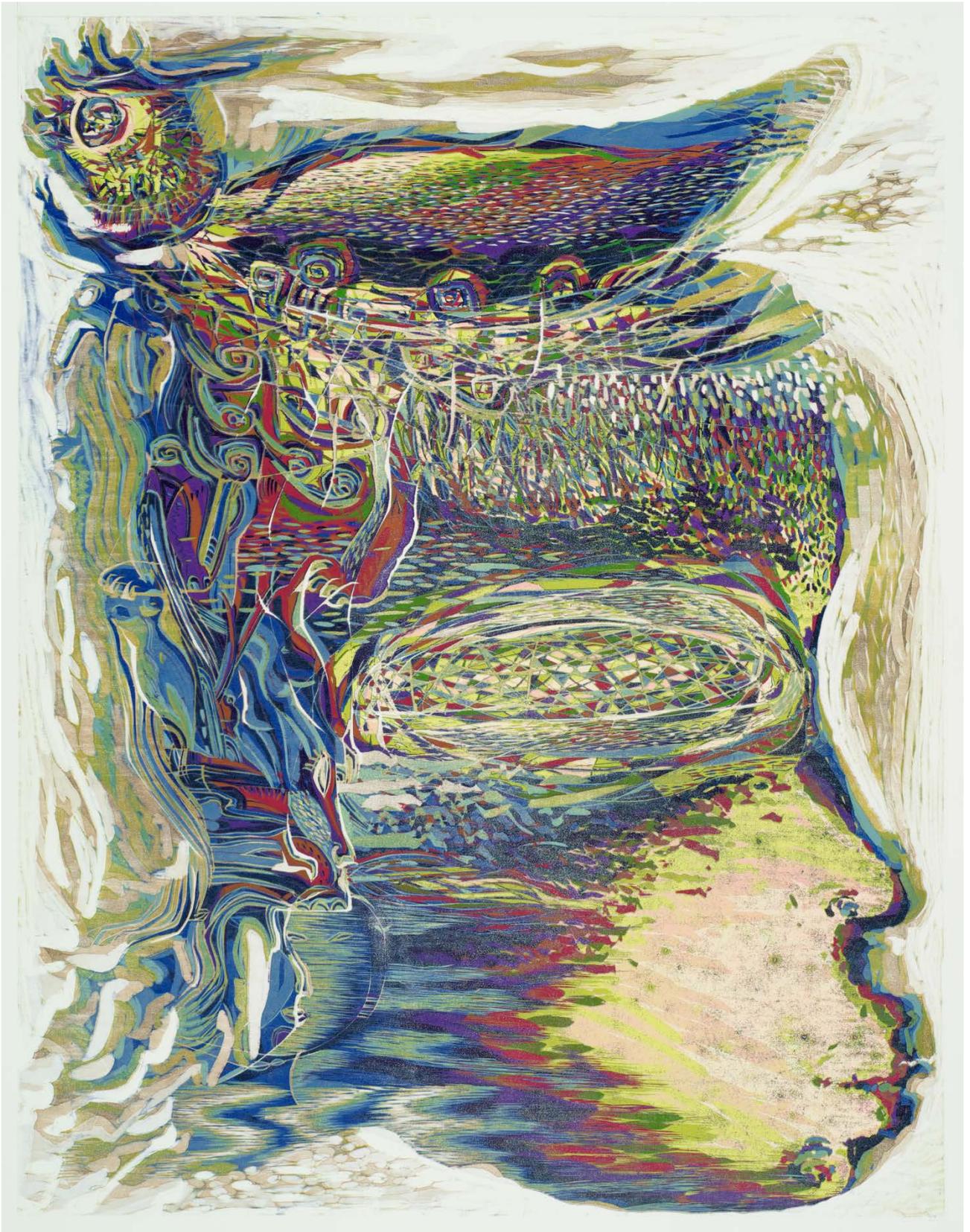
幻影 2014 木版画 70.0×91.5cm

Illusion 2014 Wood-cut 70.0×91.5cm



源泉 2012 木版画 82.0×58.0cm

the Fountainhead 2012 Wood-cut 82.0×58.0cm



宇宙を飛ぶ 2013 木版画 91.5×70.0cm

Fly with the Cosmos 2013 Wood-cut 91.5×70.0cm